

最優秀賞

【道徳・国語】

コロナ禍を乗り越える 平和学習の創造を目指して

沖縄県南城市立大里北小学校

儀間 奏子



1 はじめに

「コロナだから仕方がない。」

今年、何度その言葉を発してきただろうか。楽しみにしている行事の中止、自由に遊ぶことを許してあげられない休み時間、暑い中でのマスクの着用、給食時間での私語禁止…。

まるで全てが許される免罪符のように私はこの言葉を使ってきた。我慢を強いられる子どもたちは、その度にどのような思いをしてきたのだろうか。

4月7日に始まるはずだった新学期。突然の休校の決定や、それに伴う課題の準備に加え、今後の対策を早急に求められる日々が始まった。市内にも感染者が次々と報告され、新年度の計画が二転三転する中、教師もまた今年度の学びをどう進めればよいかと悩む時間を過ごしていた。

教師にとって今年度は試練の一年かもしれない。しかし、子どもたちにとっては、かけがえのない大切な一年。このような状態でも何かできることはないか。まだ出会っていない子どもたちに想いをはせつつ、今年しかできない学びを作っていきたいと思った。

2 コロナ禍における平和教育の創造

新年度がスタートするまでの1ヶ月半、今年度担当する4年生とどのように学びを進めるのかを

考え、また学校の「平和教育」の担当として今何ができるかを決めなければいけなくなった。

沖縄では、沖縄戦の組織的戦闘が終わった6月23日＝慰霊の日を中心に、多くの学校で平和学習を行っている。本校も6月を平和月間とし、平和学習や平和集会を企画していた。

前年度に赴任して以来、これまで全校児童で行っていた平和学習を低・中・高学年に分け、低学年は「地域のお祭りと平和について」、中学年では「世界の子どもと戦争について」、高学年が「沖縄戦とひめゆり学徒隊」について地域の方を講師に学びを行った。

今年は戦後75年という節目の年。しかし、このコロナの感染状況を踏まえ、今年度は講師を招いた平和学習を行うことが難しいという判断になった。私は新たな計画案を5月中旬に再度提案しなければならなくなった。

安全性を考えると、体験者のお話をビデオで視聴することや、アニメ等の映像から戦争を学ぶなど簡単な学習がよい。しかし、コロナだからといって、ただこなすだけの学習にするのではなく、新たな平和教育を創造したいと考えた。思案した結果、今年は、児童間の距離を空けた教室でもできる紙芝居を使って平和学習を行うことにした。

題材として取り上げようと考えたのが、学校のある南城市出身の中山きくさんの体験である。出身地が同じということで、子どもたちが身近に

感じられる上、『白梅学徒隊きくさんの沖縄戦』（沖縄県退職教職員会女性部）という絵本も図書館にも所蔵されている。

また、きくさんは白梅学徒隊の一員として、兵隊の看護を担った戦争体験者で、90歳を超えてもなお、沖縄の平和教育のためにこれまで頑張っている方でもある。個人的に、これまで何度もお話を聞かせていただき、二度とあの悲惨な戦争を繰り返してはならないと強い決意をもってお話をされるきくさんを、いつか子どもたちに繋ぎたいと思っていた。

コロナ禍の今年だからこそできる平和学習を作り上げたいと考えた。

3 | 今と昔を紙芝居で繋ぐ

外部から人を招いての平和学習が難しいと判断された4月後半から構想を練り、5月初旬の在宅勤務&GWの期間、自由に外出することが難しい状況を逆手にとって紙芝居を作成した。感染防止で教師が出勤できなければ、その時間を教材研究に充てる。当たり前のように、これこそがコロナ禍を乗り越えて学びをつくる上で第一に大切なことであった。

物語で大切にしたのは、今と昔（沖縄戦）を繋ぐことだ。

これまでの平和学習では、沖縄戦は遠い過去の出来事で自分たちとは関係のないことと捉え、形だけの学習になってしまうことが大きな課題であった。しかし、コロナによって様々なことに困っている今なら、苦しい思いを抱えているということで共感でき、自分事として考えられるのではないかと思った。これが、コロナ禍を乗り越えて学びをつくる上で第二に大切にしたい視点であった。

そこで、桜子さんという小学4年生を主人公として登場させ、コロナによって4月になっても登校できず、大量の宿題だけをさせられる毎日に不満を募らせるというシーンから物語をスタートさせることにした。

その設定ならば、子どもたちが感情移入をしや

すい。また、桜子さんには、今年1年生になる緑ちゃんという妹がいて、入学式は行われず、友達をたくさんつくるという願いも叶えることができない日々を送っているという場面を描き加えた。

これは、どの学校でも起こり得ることだ。できる限り、子どもたちの直面する現実に近い形で物語を進めていくことにした。私は、1枚1枚手書きで紙芝居を作成する作業に集中した。



○紙芝居「きくさんと桜子さん」

二人の姉妹は、いつまで続くか分からない休校期間への不満と、入学式に参加できない辛さを、ずっと一緒にいるお母さんにぶつけるようになっていった。



子どもたちと同様に学校が始まらないことへの不安を抱くお母さんは、あることを考えた。

二人の遠い親戚のきくさんが主人公の絵本『きくさんの沖縄戦』を、この機会に読ませたいと思ったのだ。二人は絵本に興味津々で、すぐにお母さんのそばに来て読み聞かせてもらった。



お母さんがまず伝えたのが、今コロナで困っている自分たちよりも、辛い思いをした子どもたちがいたということである。

それに対して妹の緑ちゃんは大反対。自分たち以上に大変な思いをしているとは、すぐには信じられなかったからである。しかし、絵本の中の昔の小学生たちは、学校は兵隊さんに使われ、授業でも戦争へ協力するように教えられていったことを知る。

この部分は、絵本には描かれていないが、当時の様子を知ることによって紙芝居を見る子どもたちも、物語の世界へ引き込まれていくと考えて付け加えた。



桜子さんと緑ちゃんは、お母さんの読み聞かせの中で、主人公のきくさんが次第に沖縄戦に巻き込まれていく様子を、絵と文と言葉で知ることになる。

先ほどまで学校に行けなくて不満を口にしていた二人は、自分たちよりも大変な人が本当にいたのかと半信半疑であったが、想像を超える悲惨な世界があったことを知る。75年前の沖縄では、自分たちと同じような当たり前の学校生活を送れなかった。主人公のきくさんは、お国のためだと

思って、白梅学徒隊の一員として兵隊の看護を担っていたことを、絵本を通して知ることになる。

寝る間も惜しんで兵隊さんのために働いたにもかかわらず、戦況が厳しくなった後は、今度は自分たちで生きろと壕を追い出される。

幼なじみと二人で、九死に一生を得て助かったきくさん。どのような状況でも、日本が勝つと信じて頑張るきくさんは、想像もできない時代を生きていたということを、子どもたちは知る。



絵本は、大人になったきくさんから、亡くなった友達への声かけと、戦争を二度と起こさないことを決意する場面で終わる。しかし、私の紙芝居は、そこから戦後の苦しい生活を強いられた沖縄の様子へと繋げていく。

なぜなら、今の沖縄と結び付けたかったからである。戦争が終われば平和なのかと言えば、そんなことはない。戦後の沖縄の人々は、戦争で何もかもが壊されてしまった現状にただ絶望するのではなく、力を合わせて復興を遂げる。平和な沖縄をつくるその努力の積み重ねによって、毎年1000万人の人が訪れるまでに復興させていったことに気づいてほしいと思ったからである。



主人公の桜子さんと妹の緑ちゃんは、紙芝居の中できくさんから沖縄戦について学び、お母さんから戦後の沖縄の様子を教えてもらうことになった。

こうしてきくさんからたくさんのことを学んだ二人は、きくさんに会いたいという希望をもち、新学期に向けての決意を新たにしていた。不満ばかり口にしていた桜子さんと緑ちゃんは、もうどこにもいなくなっていた。



主人公の二人のように、この紙芝居を見た子どもたちにも、前向きな気持ちになってほしい。そんな願いを込めた紙芝居は、コロナ禍で教師も学校へ行けない中からこのようなストーリーででき上がった。

この紙芝居は、6月の平和月間中、各学級にある電子黒板に投影して他の先生方にも使ってもらうことにした。

低学年にとっては少し難しい言葉もあるが、担任がその内容を優しく言い換えながら読み聞かせることで、ただ情報を受け取るだけのDVDでは不可能な児童と教師の対話が生まれる。そこから、学年に応じて子どもの心に届く平和学習ができるのではないかと考えたのである。

5月中旬には紙芝居を完成させ、その数日後、各学年の担任に提供し、6月の平和月間の準備を進めていった。

4 | 紙芝居を用いた平和学習

慰霊の日が近づいた6月16日。自作した紙芝居を使って、担任する4年生の子どもに道徳科の授業を行うことにした。

前日に、その平和学習の様子を取材したいと急遽地元の新聞社である琉球新報の記者から連絡があり、教育委員会の市史編纂室の方と共に授業参観を行うこととなった。学級の子どもたちは「もしかしたら自分が新聞に載るかもしれない!」と喜び、張り切る様子を見せていた。

当日は、導入段階で、子どもたちに長かった休校期間のことを思い出させ、自由に生活できない日々の辛さを発表させた。

「お母さんに勉強しなさいと怒られた」「友達や先生に会えなかった」という体験談や、有名人や沖縄の人が亡くなってしまって辛かったこと等が出てきた。その想いをみんなで共有した後、「私たちと同じように辛い思いをした人が主人公のお話を、これから知らせますね」と言って、私は紙芝居の読み聞かせをスタートした。

子どもたちと同じ4年生の桜子さんが、自分たちと同じように宿題ばかりをする毎日に飽き飽きしている様子を説明すると、「自分たちと似ている主人公はどんな人なの?」と、すぐに物語の中に引き込まれていった。

読み聞かせの際には、主人公のお母さんが子どもたちに話していたように、私が子どもたちに質問を投げかけたり、子どもたちの疑問に答えたりして対話の場面をつくっていった。

物語の最後には、社会科で学習した沖縄県の特色の一つである観光の部分想起させ、焦土と化した沖縄が、今のような奇跡の復興を遂げ



たのは、多くの人の協力があってこそだということに気づかせていった。

授業が終わると、沖縄戦についてもっと学びたい、自分たちもきくさんに会いたいという声も聞こえてきた。ことねさんは、授業の感想を次のように書いていた。

おそろしい戦争をなくしたい

ことね

先生が『きくさんの沖縄戦』を見て書いた紙芝居を見終わって思ったことがあります。

一つ目は、けが人の薬がなくなったら、のこぎりで切るとき、いたそうに見えないのかな、こわくないのかなと思いました。私だったら、こわくて、にげると思いました。

二つ目は、けがをしたへいたいさん達に、ご飯やトイレなどの世話を毎日するのは疲れないのかなと思いました。私は、絶対やらないと思いました。

三つ目は、なぜお手伝いをしたいと思ったのかなと思いました。私は、家族といっています。また、きくさんは、コロナウイルスより倍のこわさを知っていて、すごいと思います。戦争で生き残った人は、すごいです。おそろしい戦争をなくしたいです。

(沖縄タイムス「ぼくもわたしも」に掲載)

物語の中に深く入り込み、沖縄戦の悲惨さとそれを乗り越えた人間の素晴らしさの両面を捉え、今の自分と対比していることが分かる。

この授業の後、実際の沖縄戦の写真を見る機会をもち、想像していた以上に悲惨な75年前の沖縄の様子を知ること、今の自分たちと比較することができた。

紙芝居がその間にあったことで、興味をもつ子どももさらに増えたように感じる。

いつもの年であれば、昔の人は大変で、自分は今戦争とは関係のない生活を過ごすことができよかった、というような感想が出てきてしまうが、今年はコロナがあったことで、今の苦しい

状況を訴える主人公と自分を重ね合わせ、物語の中のきくさんの体験を身近に感じていってくれたように思う。

また、きくさんという魅力的な方がいたからこそ子どもたちと教材の距離が縮まり、自分事としていっそう共感的に考えてくれたのではないかなと思う。

5

学んだことを発信する ～教室から広がる平和学習～

「きくさんと桜子さん」の紙芝居を通して学んだことを作文にまとめ、NIEの取り組みの一環として、地元紙「琉球新報」と「沖縄タイムス」に投稿することにした。

学年当初から、自分の考えを文章にまとめる機会を多く取り入れたことで、6月の平和学習で学んだことも抵抗なく文章に書くことができた。その中からことねさんをはじめ、学級から数名の作文が実際に沖縄タイムスに掲載され、新聞を通して広く発信できた。

さらに、紙芝居を読んだ後に、慰霊の日に合わせて企画された新聞の特集記事を読む子ども、家族から戦争について聞いてきた子どもも出てきた。

ほのかさんは、家族と一緒に平和祈念資料館を訪れ、沖縄戦の様子を再現された壕に入り、紙芝居だけでは分からなかった本物の戦争に触れる機会をもった。その体験を、次のような文章に綴っていた。

「戦争について学んだこと」

ほのか

私は、きくさんやおばあさんから沖縄戦のことを教えてもらいました。

ごうの中に入っていた時、上の方から敵の走っている音や銃の音が聞こえてきたそうです。私は、それを聞いた時、いつ殺されてもおかしくないから辛かっただろうな、と思いました。

それから、私は平和祈念資料館の再現されたごうに入りました。そのごうの中は赤ちゃんが

泣いていて、おばあちゃんが口を押さえていました。おばあちゃんも周りの人もとてもとても苦しそうでした。

なぜ泣いている赤ちゃんの口を押さえているのかをお母さんに聞くと、戦争中は赤ちゃんが泣くと泣き声で敵に見つかってしまうからだと言っていました。また、赤ちゃんの中には、犠牲になった赤ちゃんもいるそうです。

私は、もう戦争を起こさないように、外国の方と仲良くなりたいです。

(琉球新報「僕の主張 私の意見」に掲載)

子どもたちにとって想像し難い沖縄戦も、紙芝居という題材を切り口にして、少しずつ興味をもつ子どもが出てきた。また、教室の壁面に沖縄戦の体験談が載った新聞を掲示すると、多くの子どもが興味をもって読んでいる様子が見られた。

こうして、子どもたちがさらに学びたくなった様子が見られたので、紙芝居の主人公であるきくさんと子どもたちを繋ぎたいと考えた。紙芝居の最後に、きくさんに手紙を書きたいと言った桜子さんと同様に、今度は自分たちがきくさんに手紙を書くことにした。その中には、紙芝居の感想やきくさんへの質問が書かれていた。それを郵送し、自分たちの想いを伝えることにした。

しばらくすると子どもたち宛てに、中山きくさんからの返事が返ってきた。その手紙の中の「初めて見たアメリカ人は、どうでしたか? ぼくなら、人生で一番きょうふを感じたと答えます」という質問には、「私もそうでしたよ」と一言添えられていた。

手術の手伝いで怖かったかという質問にも答えてもらう等、子どもたちが書いた手紙に対し、一人一人への一言メッセージが書かれていた。それを読んだ子どもたちは、すごく嬉しそうな表情を浮かべていて、「きくさんって、すごく優しいな」や「もっと質問したい!」という声が聞こえてきた。

きくさんからの手紙の最後には、私へのメッセージが書かれていた。

戦後75年の節目の年に、奏子先生が4年1組の皆さんと『戦争の悲惨さと平和の尊さ』について語りあった平和学習は、本当に胸が熱くなりました。

絵本『きくさんの沖縄戦』を紙芝居にアレンジして児童の興味を引き出し、活発な討論の場になったのは、素晴らしい指導法です。それに奏子先生が、沖縄戦を重要な教材として取り組んでいる姿勢が、高齢の戦争体験者の一人である私には、何より心強いことです。

私たち沖縄戦体験者が語れなくなる日は目前です。その穴を埋めてくれるのは、奏子先生です。どうぞ宜しくお願いします。コロナが収束したら交流会を持ちましょう。

それまで私も頑張ります。

中山きく

この言葉の一つ一つに、子どもたちだけでなく、私自身も大きな力をもらった。きくさんの想いを胸に、コロナ禍でも私ができることを今年受けもった子どもたちと頑張りたいと強く思った学習がこうしてでき上がった。

6 | 平和な未来をつくるために

きくさんからももらった言葉を受け、今年度受けもっている4年生の子どもたちと、さらに学びを深めたいと思った。

そこで考えたのが、紙芝居の主人公の桜子さんが、実は自分たちのクラスメートだったという内容から始まる続編の紙芝居を作成し、物語と現実世界をさらに強く繋げるという試みである。

ちょうどその頃学習していた国語の「学校についてしょうかいすることを考えよう」(東京書籍)を活用し、学級会の議題に取り上げて話し合うことができるのではないかと考えたからである。そこで、新たな紙芝居を作成し、国語の授業の中で子どもたちに紹介することにした。

○紙芝居「きくさんと桜子さんと4年1組の子どもたち」

主人公の桜子さんが、休校期間が明け学校に登校するようになり、みんなマスク姿で登場することが当たり前になった頃から物語が始まる。登校した桜子さんは、学級の子どもたちと同様に春休みにあったことを発表することになった。

桜子さんは、きくさんの絵本をお母さんに読み聞かせてもらったことをみんなの前で発表し、その後、実際にきくさんに会いに行ったことを話し始めた。しかし、桜子さんは、きくさんから大きな宿題もらったことがずっと気にかかっていた。

その宿題とは、「桜子、私はもうおばあちゃんだから、今までと同じように沖縄戦のことを伝えることはできなくなるのよ。だから、これからはあなたが私の代わりに、沖縄戦のことや平和の大切さを伝えることをしてもらえたら嬉しいな。よろしくね、桜子」という言葉である。

大好きなきくさんからのお願いに答えるために、自分に何ができるのか、とずっと悩んでいることを、桜子さんはみんなに打ち明ける…。

ここまで紙芝居を読んだ後、学級の子どもたちに問いかけた。

「みなさんだったら、きくさんのお願いを聞いてどうしますか？」

桜子さんが悩んでいる問題を、今度は自分たちで解決してほしいと思ったからである。

その難しい質問に対し、様々な意見が出された。ななかさんからは、「平和を続けさせる方法について考えたほうがよい」というアイデアが出された。みんなはそれに同意し、みんなでそのことを話し合おうということになった。きくさんの願いを自分事と捉え、みんなが真剣に考えたいという雰囲気になった。

まさにそれが、自作紙芝居と子どもたちの現実世界が繋がった瞬間であった。

その後、国語の話し合いの時間を活用し、それぞれのアイデアを出し合い、学級の意見としてまとめることにした。その対話の過程で、「戦争

と平和の違い」について深く考え、「戦争は残酷で、平和は楽しい」という意見にまとまった。

また、平和を続けさせる方法として、「みんなで仲よくする」「戦争を教えたほうがよい」という意見が出された。その話し合いの様子も絵に表し、紙芝居の続きができてきた。

また、話し合ってしばらくたった後に、今度は一人一人ができることについて考えさせたいと思った。

まず一つ目に子どもたちに考えてもらったのは、「あなたが考える『未来の平和な社会』とは、どのような世界ですか?」という問いであった。

子どもたちが考えた「未来の平和な世界」とは、「笑顔がたくさんで、戦争がない世界」「殺人や事故もない世界」「世界の子どもが、学校に行ける世界」である。

二つ目に考えたことは、そのような未来をつくるために個人ができることも書いてもらった。コロナを治せるような医者になりたい子どもや、ケンカやいじめをしないこと。ちょうどアメリカの人種差別の問題がニュースに取り上げられていたので、差別をしないと答える子どももいた。

三つ目には、「未来の平和な社会」を創るために、みんなでできることについて書いてもらった。これについては、「きくさんみたいに、戦争のことをいろいろな人に伝える」「自分がやられていやだったことや、悪いことはしない」「ケンカや仲間はづれをしない」という案が採用された。これらのまとめは教室に掲示し、友達同士で言葉による言い争いや、ケンカが起きた際には話し合ったことを思い出させ、自分たちが考える未来の平和な世界に近づけるように取り組んでいった。特に、みんなが笑顔になれるような学級づくりを意識して行っていた。

こうして、平和とはどういうことかについての認識が日常体験と話し合いの中で広がり深まり、相互に関わり合って血肉になっていく。

毎年、6月の平和月間の中で平和学習を行っているが、その期間は意識して行動してはいるものの、どうしても時間が経つにつれその意識は

薄れ、友達と仲よくしたいと言っていた子どもも、相手を傷つけてしまうような平和に反する行動をとってしまう。

しかし、今年はきくさんの言葉やみんなで話した内容を意識することで、自分事として行動するようになった子どもが増えたように感じる。



7 | 県を越えて広がる学び

今年の夏は、休校期間の延長から、10日間という短い夏休みになる予定であった。しかし、沖縄県の非常事態宣言に加え、144万人のこの島に、一時は100名を超える感染者が出るような事態になっていった。それを受け、8月11日にスタートする予定だった2学期も、休校期間の延長を余儀なくされた。

1学期以上に外部との交流が難しい中で、子どもたちの学びを広げるには厳しい状況が続く。そうした中、7月の豪雨災害で大きな被害のあった球磨村の教育委員会に勤める私の友人から、学校や地域の継続が困難の中、苦しんでいる子どもたちがいることを教えてもらった。

被災地は平和と言えるだろうか。そのことをクラスの子どもたちに紹介すると、沖縄から熊本の子どもたちに手紙を書いて元気づけたいという意見が出て、それぞれがメッセージを書こうということになった。

熊本のみなさんへ

みゆ

私は、大里北小学校4年のみゆです。大雨大丈夫でしたか？ ニュースで見ました。大変

だったよね、私もそうです。

もし私が同じことになっていたら、ショックでした。でもまた学校が使えるようになったら、とても嬉しいです。

熊本の皆さん、学校が早く使えるようになるといいですね。あと、熊本は、沖縄よりも良いところがいっぱいあります。だからそれを考えて頑張ってください。

私達も応援しています。

沖縄では、これまで大雨による被害は多くはないものの、台風の被害は子どもたちも何度も体験している。

そのため、これまでの台風被害を思い出しながら、もし自分だったらどのような言葉をもらおうと嬉しいのかを想像することにした。6月の平和学習と同様に、自分には関係のないこととして捉えるのではなく、自分事として物事を考える。今回、一度も会ったことのない人たちを想像して手紙を書くことができたのは、平和学習の中できくさんへの手紙を書いていたからこそぞとと思う。

子どもたちのメッセージや折り紙を貼った絵は、球磨村の渡小学校と一勝地小学校へと届けられた。両校の校長先生からは、沖縄からきた手紙をすごく喜んでいたという電話があったことを、校長先生を通じて子どもたちに伝えられた。その話を聞いて子どもたちは、「書いてよかった」と素直に喜んでいた。

手紙を送った子どもたちも、受け取った熊本の子どもたちもどちらも嬉しい体験ができたのではないと思う。このように、身近な人だけでなく自分たちができることを少し行うことは、子どもたちが描く「未来の平和な世界」の中の、「笑顔がたくさんで、戦争のない世界」に繋がるのではないと思う。

平和学習はこうした分野へも広がっていく。

8 | おわりに

コロナ禍で、これまで当たり前になっていたことができない毎日の中で、「コロナだから仕方ない」

と全てを諦めるのは簡単である。

しかし、「コロナだからこそできることは何か」と発想を転換することで、紙芝居で対話を広げる教室での平和学習や新聞を通した学び、物語の世界と現実世界を繋げる取り組み、県を越えた学びの発展へと学びが広がっていったように感じる。

当初は紙芝居を使った学習は教室だけにとどまっていたが、やがてこの紙芝居は、隣の学校や、中山きくさんの所属した白梅学徒隊の碑が校区内にある小学校でも活用されることになった。

大きなことを一度に行うことはもちろんできないが、小さな努力を重ねて広げることによって子どもたちの学びを広げるきっかけになったと思う。

9月の中頃には、6月の平和学習の経験を書いたほのかさんの作文に感銘を受けた名護市に住む山城さんという方から、彼女宛の手紙が学校に届けられた。小学校時代に沖縄戦を体験し、妹の死を無駄にしたくないと活動続ける元教師の山城さんからもらった言葉の中に、「高齢の私に代わって平和・命どう宝・人権の大切さを語りつぐ『平和の使者』として相手を認め合い、協力しあい、思いやりの心で夢と希望をもって頑張って欲しい」という文字が添えられていた。

「未来の平和な世界をつくるためにみんなができること」を考えた子どもたちが、「きくさんみたいに、戦争のことをいろいろな人に伝える」という活動を行ったからこそ、新聞を読んだ山城さんと平和のバトンが繋がったのだと思う。

また、山城さんからは、6月に行った紙芝居を使った新聞記事を見て、私宛にも「素晴らしい平和教育に感動しました。一読くだされば幸いです」と手紙と資料が添えられていた。教室で行った一時間の平和学習から、少しずつ輪が広がっている。

子どもたちは、いつも「平和について」「沖縄戦について」「未来の平和な世界をつくる」と考えている訳ではない。しかし、自分たちが書いた作文が新聞に掲載されるたびに自分たちの学びを思い出す。アメリカの人種差別問題がニュース

で取り上げられて興味をもった子どもの意見から、世界の問題と未来についてクラスで考える機会ができる。手紙を書いた中山きくさんや、新聞を読んだ山城さんからメッセージが届けられたときに、これまでの学びが点から線へと繋がってきたように感じる。こうして、子どもたちの学びは鎖のようにまだまだ続く。

3月の末、紙芝居の結末がどこに繋がるのかと、今からすぐく楽しみである。

コロナという未曾有の危機は、人々の生活を苦しめると同時に、今まで考えつかない可能性も多く生み出しているのではないか。それは、いま目の前にいる学級の子どもたちにも言えることだと感じる。私たちはその小さな可能性をすくい上げて、大きく育てなくてはならない。

素晴らしい可能性の一方で想像のつかない困難がこれから起こる未来に向けて、これまでと変わらない取り組みを続けるのではなく、臨機応変で柔軟な対応が求められるようになっていく。

一人一人が「未来の平和な世界」を創る市民となる明るい未来を信じて、子どもたちと一緒にこれから学び続け、内に秘めた可能性を広げていける教師でありたい。